

WRV NEWS LETTER

WILDLIFE RESCUE VETERINARIAN ASSOCIATION

特定非営利活動法人 野生動物救護獣医師協会

No.120

2022.3.25 発行



野生動物救護獣医師協会は、保護された傷病野生鳥獣の救護活動を通じて市民の野生鳥獣保護思想の高揚をはかるとともに、地球環境保護思想の定着化を目指しています。そのために、常に世界の情勢を学び、会員相互の連絡、交流を行い、治療、研究および知識の普及をはかり、社会に貢献していくことを目的としています。

No.120 目次

(続)アカアシカツオドリの放鳥で考えたこと	2-5
施設紹介—高知県立のいち動物公園	6-8
令和3年度油等汚染事故対策水鳥救護研修 実施報告	9
令和4年度「ヒナを拾わないで!! キャンペーン」	10
書籍紹介—「野生動物の法獣医学 もの言わぬ死体の叫び」(浅川満彦 著)	11
寄付のお礼	11
事務局日誌	12

(続)アカアシカツオドリの放鳥で考えたこと

NPO 法人小笠原自然文化研究所 鈴木 創・鈴木直子

●小笠原の傷病鳥獣事情

私たち小笠原自然文化研究所は、父島および母島で傷病野生鳥獣保護の業務（東京都委託）を行っています。父母あわせて、年間で200～300件ほどのレスキューがあり、半分以上が繁殖分布する海鳥類で、固有種や希少種の割合が多いことも特徴です。30以上の島々で構成される小笠原諸島において、保護のほとんどはごく限られた有人島で発生します。有人島における主な保護要因は、巣立ち期のミズナギドリ類の人工照明への誘引、陸鳥・海鳥のバードストライクや交通事故、ノネコによる捕食、オオコウモリの農作物の防除ネットへの絡まり事故などです。逆に近年、有人島以外（無人島や海域）などで発見された傷病野鳥については、個体の保護やデータ収集が必要な絶滅危惧種や、人為的な要因の事例等を除いて、積極的に手をつけずにアナウンスされています。この他、コクガン、ナベヅル、コハクチョウ、レース鳩などの珍客が迷い込むこともありますし、逆に、コアホウドリやネットタイチョウなど、小笠原諸島からの迷鳥である可能性が高い海鳥が、本州などで保護されて相談を受けることもあります。

●コアホウドリの話

今回、最初に考えたのは「小笠原産のアカアシカツオドリだろうか？」という点です。傷病鳥獣の放鳥は原則として保護場所ですが、生息域や繁殖地が限られる南方系の希少種の場合は、時折相談が来ることがあります。以前、国内営巣地が小笠原諸島のみのコアホウドリの放鳥について、動物園から小笠原での放鳥依頼があった際に、対応を決めたのは「足環標識」でした。1980年代にコアホウドリが自然定着した後、小笠原ではすべてのヒナに足環を装着しているため、未標識の保護個体は小笠原（日本）以外（※ハワイの個体群など）の可能性が高くなります。春季に「おがさわら丸」に乗ると、小笠原の個体群とは思えない大規模なコアホウドリの集団を、伊豆諸島北部で観ることがあります。実は、東日本沿岸でコアホウドリが保護されるのも春季がメインです。相談のあったコアホウドリは未標識でした。そこで、東日本太平洋沿岸域の豊富な餌資源を求めて飛来した、集団からはぐれた個体と推察し、東京港で受け取ったコアホウドリは、小笠原には連れ帰らず、伊豆諸島沖で放鳥しました（松本ら、2005、今日のレスキュー、2008）。今回のアカアシカツオドリでは、前号で述べたように太田佳似先生による流跡線解析の結果が決め手となり、小笠原集団の迷行個体と位置づけて、移送準備をはじめました。



写真1 おがさわら丸からコアホウドリを放鳥

●日本唯一のアカアシカツオドリの集団営巣地

アカアシカツオドリの国内唯一の集団営巣地がある南硫黄島は、人の住む小笠原群島（父島、母島など）から300 km南にあって硫黄列島に属します。樹上集団が確認されている北硫黄島とともに、定期航路のない無人の山岳島です。特に南硫黄島は、漂流者を除き定住記録がなく、ネズミ類の侵入がない世界にも稀な島であり、原生自然環境保全地域に指定され、人の立ち入りが制限されています。南北硫黄島は、ともに巨大な海底火山が洋上に顔を出した頂部です。島の外周を海食崖が囲み、潮煙をまとう崖上の森林に、アカアシカツオドリは営巣しています。稀に周辺海域を訪れる調査船や、客船を観察しに来るのは彼らで、彼の地では我々は見られる側の存在です。この他、世界で唯一確認された営巣地が南硫黄島であるクロウミツバメ（固有種）や、オガサワラミズナギドリ（固有種）、シロハラミズナギドリが数万というオーダーで繁殖しています。南方系の海鳥の楽園・小笠原の核心部と言えます。救護個体の目指すべき海域は定まりましたが、「どのように南硫黄島を目指すべきか？」「個体をどのように集団に導くか？」という点については、大きく悩むことになりました。

●南硫黄島の調査検疫

2022年現在、小笠原諸島の環境保全上、最大の課題は外来生物です（科学委員会下部—新たな外来種の侵入・拡散防止に関するワーキンググループ, 2016）。自然環境の調査時に、最も注意するのも外来種の移動防止です。無人島調査では、乗船前に靴底洗浄や、衣類、ザック等の付着物をチェックする等、自分自身が運搬者にならないための作業手順が存在します。しかし、数ヶ月本土で過ごした大型海鳥を小笠原に運搬する際に、参考となるプロトコルはありませんでした。特に、救護個体の最終目的地は、最上位のプロテクト地である南硫黄島です。これまで私は、10年に1度の南硫黄島調査隊に参加経験がありました。この時は、本土から父島、父島から南硫黄島と、検疫の導線を区分した上で、各所で必要な処置を組み上げました。また、持ち込み品はすべて新調し、購入困難な高額機器等については、徹底的な洗浄や混入物チェックを行いました。上陸時はウェットランディング（海中から上陸）するなど、人間が一時滞在するために、最大限の外来種の移動防止策をとりました（加賀・佐々木, 2018）。この南硫黄島の調査検疫の経験を、今回のアカアシカツオドリの運搬時に参考としました。



写真2 南硫黄島へのウェットランディング

その結果、重大な人獣共通感染症等（ウエストナイルウイルス感染症、オウム病、Q熱、ニューカッスル病、サルモネラ感染症、鳥インフルエンザ）と共に、すでに現実的なリスクが想定されている血液原虫の調査も実施することにしました（鈴木, 2022, Maekawa *et al*, 2022）さらにウェットランディングしながら、放鳥時の「大水浴」（前号参照）を、検疫及び個体の生命維持上も必須なイベントと捉え、敢えて「大水浴」を促し、確認できる行程を組みました。なお、小笠原における施設、技術的な制限もあり、一定期間の隔離、感染症の検査や寄生虫駆除はすべて本土で実施し、到着後はすみやかに放鳥へ移行しました。

●海鳥が運ぶもの1

この南硫黄島で、生態系の中の海鳥について実感を持った経験があります。2017年調査の時に、300 km離れた父島属島の南島で、標識放鳥されたカツオドリの死体が見つかりました。カツオドリの移動分布能力が高いことは、データや知識としては理解していましたが、この出来事は、まさに彼らの活動域を実感させるものでした。また、原生といわれる同島で、外来草本の侵入と分布拡大が確認されました。付着性の植物種子を持つシンクリノイガで、特に海岸域の海鳥営巣地に集中していました。本種は、カツオドリの大集団営巣地である父島属島の南島で繁茂しており、長年の駆除が続いていますが、カツオドリやオナガミズナギドリの身体に付着する様子が確認されており、海鳥による外来植物の拡散が懸念されていました。南硫黄島の営巣地周辺のシンクリノイガの繁茂は、外来種が海鳥によって運搬されることを具体的に示すものでした。



写真3 身体にシンクリノイガを付けて飛ぶアカオネツタイチョウ

●海鳥が運ぶもの2

傷病鳥獣対応が、新たな知見の集積に繋がったもうひとつの経験がありました。父島や母島におけるミズナギドリやウミツバメ類の保護個体の眼窩から、多数のヒル（ヤマビル）が見つかったのです。ヒルの専門家によれば、海洋島で生息が確認されるヤマビルの種類もいて、その広域分布は、「渡りを行う鳥類」への寄生によって成立したに違いないと考えられてきたそうです。しかし、実際に長距離の渡りを行う鳥類が宿主として報告された例はなく、初めての実証報告となりました。なんと、小笠原のミズナギドリ類から発見されたヤマビル

は、太平洋中央部に位置する、パルミラ環礁に生息しているヤマビル類の「パルミラフタアゴヤマビル」であることが明らかになりました (Nakano *et al.*2020、中野, 2021)。ヒルは南硫黄島の山域の営巣地で海鳥を介して生活し、また、移動能力の高い海鳥を乗り物として分布を拡大しているのです。今回の、感染症や寄生虫の持ち込みを予防する検査と処置は、保護個体とともに、個体が戻るべき野生個体群への人為的なリスクを低減するために実施しました (前号参照)。全てのリスクを排除することはできないし、現実的でもありません。また、そもそも何がリスクなのかについても、実はまだまだわかっていません。また、生態系の連鎖の中では、生物の組み合わせにより、正に働く事象も、負に働く事象も起こりえます。シンクリノイガやヤマビルの事例は、多様な視点で自然環境を調べることの重要性と、それらの知見の蓄積が、救護個体の野生復帰や、個体群と生育環境の保全に重要であることを改めて教えてくれました。



写真4 オーストンウミツバメの目に寄生したヤマビル

●目の前のホント

私たちの所属する小笠原自然文化研究所は、主要な活動としてアカガシラカラスバトやオガサワラオオコウモリ、希少海鳥などの調査や保全、共生の取り組みを続けています。あまりにも減りすぎた野生生物が、連鎖的な負のスパイラルに落ち込む「絶滅の渦」と言われる局面があります。打つ手が次々と裏目に出たり、個体の損失が、個体群そのものの絶滅に直結する厳しい状況です。アカガシラカラスバトが「崖っぷち三冠王」と呼ばれていた時期、山では、調査による直接的な攪乱や、生息地へのノネコの誘い込み防止などに神経を使いました。初めての野生ヒナへの足環装着の際には、あまりに軽い手のひらの「種の 1/40」に足が震えました。そして、社会的な事柄も含めて、絶滅危惧種を救うということがどれほど多岐にわたる取り組みを必要とするのか、勉強の連続でした。同時に、一定の仕組みや法律はあっても、絶滅危惧種を救う経験やノウハウが、日本では圧倒的に不足していることも思い知りました。また、沢山の事前練習が必要なことも痛感しました。知った気になっていた机上の保全担保が崩れて、あまりに脆弱な現実が急に見えてくるような重い体験でした。

●傷病鳥獣という「窓」

アカガシラカラスバトが、「残り 40～60 羽」とも言われた 20 年前(2000 年頃)。今、絶滅の危機に瀕しているオガサワラカワラヒワは、普通に群れが観られていました(川上・川口, 2022)。その後の急激な生息状況の悪化を、当時は予想できなかったのです。現在、主にノネコの対策によって絶滅の縁から抜け出しつつあるアカガシラカラスバトは、次の困難に直面しています(有川, 2013, 2018、堀越ら, 2020)。交通事故やバードストライクの急増です。救護や治療においても、衝突による打撲や骨折等への対応が多く求められる段階に入ったのです。しかし、これは野生動物にとって新たな試練ではなく、これまで普通種のトラツグミなどで起きてきた事例でした。傷病鳥獣の事象は、野生動物が生きる空間と、人の生活空間との交点であり、彼らの側から、時々の人為の形を見ることができる「窓」です。「人為」は、想像をこえて小笠原の隅々に行き渡り、影響は強力です。共生とは、「窓」ごしの情報をキャッチして深化させ、人の対応や人為空間そのものをいかに変化させてゆくか、つまり「極めて具体的な技術と創意工夫の問題」であることを、「窓」からの景色は気づかせてくれました。そして、技術や工夫を生み出す源は、様々なデータ、経験と試行錯誤であることを、実感を持って今は理解することが出来ます。

●チャレンジする意味

今回、アカアシカツオドリ 1 羽の搬送で、設計から放鳥まで、初めての試行が沢山ありました。実は、アホウドリで有名な、羽毛の採取目的の乱獲などの海鳥への人為的影響は、他の海鳥種にも及びました。現在、小笠原諸島で観えているのは「まだまだ回復期にある海鳥たちの世界だ」、と私たちは捉えています。また今回、流跡線解析により推定された救護個体の迷行の因子は台風でした。地球規模の気象変動については、さらに長期的観測が必要かもしれません

んが、少なくとも過去 50 年間をみると、小笠原諸島では深刻な気象災害が増加傾向にあり、それらが数を減らした野生動物にとって大きな脅威となっていることを強く感じます(鈴木, 2022)。生物が生きる地球環境そのものに、人為が大きく関わる時代を迎えています。多くの野生生物が、まさに絶滅の縁に立ってしまう前に、試されるべきこと、得るべき知見が非常に沢山あると考えています。アカアシカツオドリは、国内希少種ながら世界の熱帯海域に分布するため、地域絶滅は種の絶滅に直結しません。しかし、生物の地理的分布から考えれば、日本(硫黄列島)の集団営巣地も重要な 1 地域であり、その実態は小規模で不安定です。「小さな地域集団ごと巨大台風」に流されていたら、あるいは、「もしも、この鳥が最後の 50 羽のうちの 1 羽だったら」、決して望んでいるわけではありませんが、そんな局面でも役立つ知見となることを片隅で意識しながら、現地放鳥をサポート・記録させて頂きました。小笠原のアカアシカツオドリや、他の絶滅危惧種の保全を進める上でも、また、小笠原と本土間の野生動物の移動検疫をプロトコル化するためにも、今回の協働は有用で示唆が多く、議論のたたき台にされるべき、先行事例であると考えています。



写真5 北硫黄島を背景に飛ぶアカアシカツオドリの若鳥

有川美紀子(2013)アカガシラカラスバトの棲む島で. 堀越和夫(監修). 小笠原自然文化研究所. 37pp

有川美紀子(2018)小笠原が救った鳥:アカガシラカラスバトと777匹のネコ. 緑風出版. 193pp

堀越和夫, 鈴木 創, 佐々木哲朗, 川上和人(2020)小笠原諸島父島における外来ネコ対策後のアカガシラカラスバトの個体数増加. 日本鳥学会誌 69(1): 3-18

川上和人, 川口大朗(投稿中)オガサワラカワラヒワの生態と個体群の現状. 特集 オガサワラカワラヒワ保全計画作りワークショップ FinalReport. Ogasawara Reserch,48

今日のレスキュー(2008) コアホウドリ 2008年11月20日(木)<http://www.ogasawara.or.jp/topic/?m=2008> 特定非営利活動法人 小笠原自然文化研究所ホームページ(最終閲覧日:2021年12月25日).

科学委員会下部 新たな外来種の侵入・拡散防止に関するワーキンググループ(2016)世界遺産地域小笠原諸島 新たな外来種の侵入・拡散防止に関する検討の成果と課題の整理,7

加賀芳恵, 佐々木哲朗(2018) 南硫黄島調査における外来生物の拡散防止策. 特集 南硫黄 2017. Ogasawara Reserch,44:67-90

Maekawa Y, Kimura R, Kasai A, Takeuchi M, Inumru Mizue, Sato Y, Komagata O, Sawabe K, Tuda Y (2021) Faunal and genetic studies of mosquitoes on Chichi-jima and Haha-jima, the Ogasawara (Bonin) Islands, Japan. Med. Entomol. Zool. 72. (4): 237-253.

松本令以, 加藤千晴, 山本芳郎, 鈴木 創, 川上和人, 須永絵美, 石井宗治, 倉地陽子, 山本裕彦, 植田美弥, 松井桐人, 草村弘子, 玉井勘次(2005) 台風通過後に神奈川県内で救護されたコアホウドリの3例について. 第11回日本野生動物医学会講演要旨集. 11:123

中野隆文(2021)ヒル(屋)が鳥(屋)に出会う時. 山階鳥研 NEWS(298):4.
http://www.yamashina.or.jp/hp/yomimono/seabirds_and_leech.html (最終閲覧日:2021年12月25日).

Nakano, T., Suzuki, H., Suzuki, N. Kimura, Y., Sato, T., Kamigaichi, H., Tomita, N., & Yamasaki, T. (2020) Host-parasite relationships between seabirds and the haemadipsid leech *Chthonobdella almyrae* (Annelida: Clitellata) inhabiting oceanic islands in the Pacific Ocean. *Parasitology*, 147(14): 1765-1773. DOI: <https://doi.org/10.1017/S0031182020001729>

鈴木 創(投稿中)気象災害グループセッション報告. 特集 オガサワラカワラヒワ保全計画作りワークショップ FinalReport. Ogasawara Reserch,48:

鈴木 創(2022)小笠原におけるアカアシカツオドリの放鳥記録. WRV NEWS LEETER(119): 6-8

高知県立のいち動物公園

飼育課 動物病院係 係長 金崎 依津子

施設概要

高知県立のいち動物公園は、平成3年11月3日に高知県香南市野市町に開園し、今年で30周年を迎えました。「人も動物もいきいきと」をコンセプトに、19.9haの敷地内に温帯の森、熱帯の森、サバンナゾーン、ジャングルミュージアム、こども動物園の展示区分があり、101種1,391点（令和3年12月31日現在）の動物をできるだけ自然に近い生息環境を再現し飼育展示しています。さらに周囲を山に囲まれており、園路で様々な野鳥も観察されます。

野生動物保護活動

県の委託を受け、傷病鳥獣の野生復帰を目指した治療・リハビリ活動を行っています。保護は主に鳥類で、時々イタチやムササビ、アブラコウモリなどの哺乳類も受け入れます。要因としては、巢の落下や木の伐採などに伴う幼鳥や幼獣の保護、衝突事故（バードストライクや交通事故）などが多いです。保護動物の治療を行うのは当園の獣医師3名で、園内動物の健康管理と並行して実施しています。



骨折したキビタキの治療



ジップロックで吸入麻酔



アブラコウモリの幼獣



ノウサギの仔

平成22年に、野生動物保護棟（58.0㎡）とリハビリケージ（28.0㎡）が建設されました。野生動物保護棟は感染症対策もあり、園内動物の飼育場所とは離れたところにあります。リハビリケージは、主に猛禽類の野生復帰を目指した飛翔訓練を行う施設で、園路の一角にあり、来園者からも観察できます。救護動物についての経緯を掲示することで県内に生息する野生動物への理解を深めてもらう目的も担っています。フクロウ、ミサゴ、チョウゲンボウ、トビ、オオタカ、クマタカなどがリハビリを行い、野生に戻っていきました。クマタカは、高知市のわんぱーくこうちアニマルランドで保護・治療を受け、当園のリハビリケージでしばらく飛翔訓練を行った後、須崎市の四国自然史科学研究センターにより山林に放獣された経緯があり、希少種を保護した際など、県内の野生動物保護施設の連携も大事だと感じました。



保護棟外観(飛行訓練スペースあり)



保護棟内部



リハビリケージ



リハビリ中のクマタカ

保護内容と実績

過去5年間の主な保護動物の内容を表に示しています。おおむね年間50～60件の保護があり、保護の4～5割が放鳥獣できる年もあれば、3割以下の年もあります。ムササビばかり来る年、アオバズクばかり集まる年もありました。ヨタカやヒクイナ、アルビノのムクドリなど珍しい鳥も保護されて来ました。台風でミズナギドリやセグロアジサシなどの迷鳥も来ます。様々な種が保護され手探りな所もありますが、ただ治療するだけでなく、それぞれの動物に適した飼育環境や給餌内容を成長や治療過程に合わせて変化、工夫することがとても大事だと感じます。

〈過去5年間の保護件数、死亡・放鳥獣件数〉

	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年
鳥類	43	50	39	27	43	32
哺乳類	9	17	13	5	4	2
爬虫類	1	0	1	1	0	0
死亡	28	32	36	12	12	16
放鳥獣	23	32	13	18	29	17
保有	2	3	4	3	6	1



雛から育ったアオバズク(飛行訓練中)



ヒクイナの雛



骨折したヨタカ



園内の山に放鳥

保護活動への思い

保護されたときには小さかった動物たちが無事に成長してくれた時や、一生懸命治療した鳥が飛べるようになった時は、とてもうれしく思います。しかし、いざ野生復帰となると、寂しさというよりも不安の方が強いです。生き抜く術は人ではほとんど伝えられないことと、彼らにとって当たり前の生活が当たり前にできる環境が残っているのだろうか、ということがいつも気がかりです。直接保護するだけでなく、まずは、多くの人に動物や自然環境への興味や知識を持ってもらうことが大事だと思い、園内に野生動物紹介コーナーを設けたり、「動物病院だより」というブログを作ってHPやSNSも活用し、園内動物のことや保護動物のことを発信しています。本当は野生復帰した動物たちを追跡調査するまでが、本来の保護活動なのではないかと思っはいますが、現状は難しいです。



ムササビの人工哺育



成長の後、無事に放獣



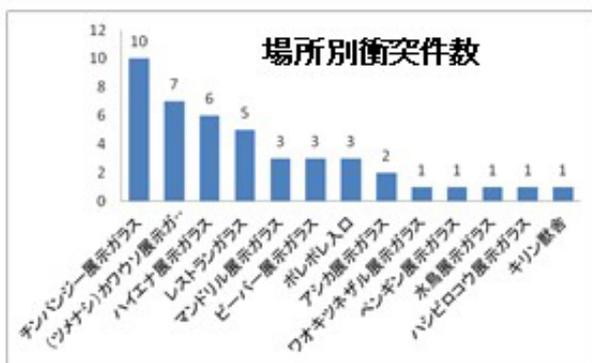
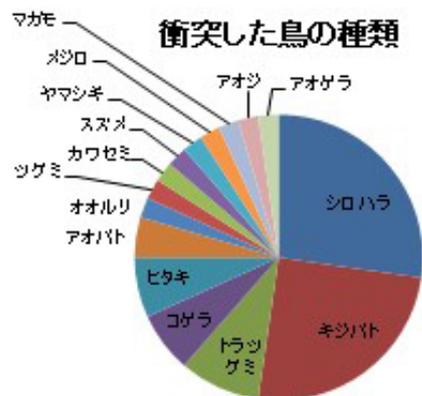
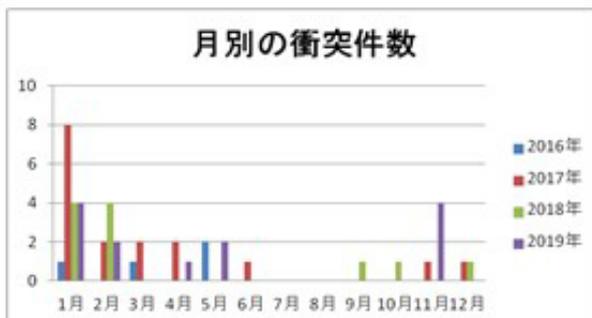
園内傷病鳥獣揭示物

また、のいち動物公園は、ガラス展示の展示場も多く、園内で年間約20件の野鳥の衝突死が確認されます。動物園自身が、野鳥の衝突の原因となってしまっていることに心を痛めています。発生場所や鳥種、季節などのデータを集めて分析し、より良い対策を探し、園路にやってくる野鳥が、命を落とすことのないような工夫を色々試していると思っています。



ガラスに衝突したアオグラのレントゲン検査

のいち動物公園内での野鳥のガラス衝突状況



衝突防止ステッカー(カワウソ前)



ハイエナ展示ガラス



レストランガラス



チンパンジー展示ガラス

令和3年度油等汚染事故対策水鳥救護研修 実施報告

WRV事務局 齊藤量子

本年度も、これまでと同様に「油等汚染事故対策水鳥救護研修」(環境省・請負事業)を開催しましたのでご報告致します。

本年度は、現場救護リーダー向けの第1回および第2回を10月28日・29日、11月25日・26日にそれぞれ実施しました。新型コロナウイルス感染症対策として、参加者の上限人数を、例年の半数に設定することによる開催でしたが、鳥獣保護行政担当者をはじめ、動物園水族館関係者、獣医師、学生、関連ボランティア等、様々な立場の方々にご参加いただくことができました。

研修では、各分野の専門知識を持った講師による、油の性質や油等汚染事故の基礎知識、水鳥専用リハビリプールの組み立て、情報の整備や関係機関の体制づくり、水鳥の生態、油汚染鳥の救護・治療・リハビリ等の実体験を交えた講義や実習が行われ、参加者の方々は、どの講義や実習にも積極的に取り組んでいる様子でした。

一方現地研修につきましては、誠に残念ながら、コロナ禍の影響により、昨年度に引き続き開催を見送ることとなりました。

本年度は、やはりコロナ禍の影響により、例年通りの研修や交流会を行えなかったことが悔やまれますが、参加人数を減らしたことにより、却って充実した実習を受けることができたとの意見もあり、今後の実習の実施方法について示唆を得ることができました。

なお、鳥獣保護行政担当者向けの第3回研修につきましては、3月下旬にオンラインで実施することとなりました。

令和3年度油等汚染事故対策水鳥救護研修にご参加頂いた方々には、研修で得られた知識、技術や人脈を、水鳥救護における体制づくりや現場での活動に活かしていただけますよう、心より願っております。



現場救護リーダー向け研修風景



洗浄実習風景

◆令和4年度「ヒナを拾わないで!! キャンペーン」◆

WRV事務局長 箕輪 多津男

本年もこれまでに引き続き、(公財)日本鳥類保護連盟及び(公財)日本野鳥の会との共催により、「ヒナを拾わないで!! キャンペーン」を実施致しております。

令和4年度のキャンペーンに関して、当協会あてにご協賛いただきました団体(または企業)は、それぞれ以下の通りとなっております。ポスターにも既にご芳名を掲載させていただいておりますが、今回も関係各位より多大なるご協力を賜わり、誠にありがとうございました。ここに厚く御礼申し上げます。

<ヒナを拾わないでキャンペーン/協賛団体リスト> (42団体:五十音順)

公益社団法人 愛知県獣医師会	公益社団法人 秋田県獣医師会
公益社団法人 石川県獣医師会	公益社団法人 茨城県獣医師会
一般社団法人 岩手県獣医師会	公益社団法人 大阪市獣医師会
公益社団法人 大阪府獣医師会	公益社団法人 岡山県獣医師会
公益社団法人 北九州市獣医師会	公益社団法人 岐阜県獣医師会
公益社団法人 京都市獣医師会	公益社団法人 京都府獣医師会
株式会社 共立商会	公益社団法人 神戸市獣医師会
公益社団法人 滋賀県獣医師会	公益社団法人 静岡県獣医師会
NPO 法人 自然環境アカデミー	全国愛鳥教育研究会
高尾霊園犬猫墓地	東京環境工科専門学校
公益社団法人 東京都獣医師会	公益財団法人 動物臨床医学研究所
中津動物病院	一般社団法人 長野県獣医師会
公益社団法人 名古屋市獣医師会	公益社団法人 奈良県獣医師
公益社団法人 新潟県獣医師会	公益社団法人 日本獣医師会
一般社団法人 日本小動物獣医師会	公益社団法人 日本動物病院協会
馬場動物病院	一般社団法人 兵庫県獣医師会
公益社団法人 広島県獣医師会	文永堂出版 株式会社
公益社団法人 北海道獣医師会	一般社団法人 宮崎県獣医師会
武蔵村山ペットメモリアルパーク	森久保薬品 株式会社
野生動物リハビリテーター協会	公益社団法人 山口県獣医師会
公益社団法人 横浜市獣医師会	公益社団法人 和歌山県獣医師会

会員の皆様には、このニュースレターとともに本年度のポスターを同封させていただきましたが、本キャンペーンの主旨をお汲み取りいただき、これからもその普及啓発のため、お力添えいただければ幸いに存じます。

国内外においては、一昨年来の長きに渡りコロナ禍に見舞われ、実に多くの方々は今も苦しんでおられますが、犠牲になられた方々のことを聞き及ぶにつれ、人の命の大切さを、改めて思い知らされる次第です。同時に、野生生物の命についても様々な角度から想起せずにはおられません。

あらゆる野生生物と私たちヒトとの共生の実現、そして将来に向け、生物多様性と掛けがえのない生態系の存続を確かなものにしていくために、WRVではこれからも活動を展開してまいりますので、皆様のご支援とご協力を、改めてよろしくお願い申し上げます。

「野生動物の法獣医学 もの言わぬ死体の叫び」 (浅川満彦 著)

118号に引き続き、酪農学園大学教授の浅川満彦先生による最新の著書である『野生動物の法獣医学 もの言わぬ死体の叫び』を、改めてご紹介させていただきます。

法医学と言えば、刑事事件や不慮の事故等に関連して、人の死因をはじめ事件の経過や隠された真相の詳細に迫るべく、解剖学をはじめ、様々な生物反応や化学物質の検出など、先端の科学捜査の技術を使い、これを法律に照らして実証していく、言わば生体ではなく死体をもとにした医学分野とすることになるかもしれませんが、本書が提唱しているのは人を対象とするのではなく、野生動物を対象とする「法獣医学」です。

野生動物は、もともと「無主物」として扱われるため、人の管理下にある飼育動物や伴侶動物と違い、法的な検証等にはそぐわない印象がありますが、現状を見渡してみると、事故や窓ガラスを始めとする建築物への衝突、あるいは薬物中毒や故意による虐待など、様々な人為的要因によって死亡あるいは傷害を被る例が後を絶ちません。また、人獣共通感染症を始めとする様々な疾病の原因となる野生動物の存在も次々と明らかになってきており、そのことは私たち人の社会を常に直撃し、パンデミックを引き起こす可能性を秘めています。その他にも、農業や林業、あるいは水産業等と野生動物との関連において、何らかの事件性を露出する事例も少なくありません。

こうした前提のもと、野生動物の死体をもとに、死因のみならず、生態学的な観点を含めた事態の経緯や、さらには将来に向けた予防法の研究を含めた、科学的かつ総合的な検証を実践するための「法獣医学」の確立の必要性について、本書は強く訴えております。このことは同時に、現在、世界的に広く認識されつつある「ワンヘルス」(人・動物・環境のすべてに共通する健康)の概念にも、深く通じるものがあります。

欧米には、既に先進的な研究事例もあるようですが、日本における獣医学の新たな分野として、「法獣医学」の確立ということが今や不可欠になってきているとも言えるでしょう。本書には、鳥類、哺乳類、爬虫類など、水棲動物も含めた具体的検証事例も数多く掲載されているので、それらを一つ一つ追っていくだけでも大変興味深く、得るところは大きいものと確信できます。

日頃から獣医学や動物看護学分野に関わっている方々だけでなく、こうした分野に少しでも関心を持っておられる一般の方など、これまでにないオリジナリティーあふれる内容ですので、広く一読をお勧めしたいと思います。WRV 会員の方々にも是非一度、手に取っていただけると幸いです。

なお、本書の表紙絵やイラストについては、現在、小学館週刊少年サンデーに「ラストカルテ」を連載中の漫画家であり、浅川先生の御令嬢である浅山わかび(ペンネーム)さんが担当されております。

(WRV 事務局長 箕輪 多津男)

「野生動物の法獣医学 もの言わぬ死体の叫び」 浅川満彦 著

本体価格 : 1,800円 (税別) サイズ : 四六判 ページ : 256ページ

発行日 : 2021年12月31日 出版社 : (株) 地人書館

◆問い合わせ先◆ (株) 地人書館 〒162-0835 東京都新宿区中町15

Tel) 03-3235-4422 Fax) 03-3235-8984

【 事務局より寄付のお礼 】

寄付ご協力者 (敬称略) (令和3年12月1日から令和4年2月28日)

○神奈川支部寄付金 2022.2.14 キンジョウテルオ 30,000円

事務局日誌 2021.12.17～2022.3.16

=== 12月 ===

- 17: 帝京科学大学「野生動物と展示動物の福祉」(千住キャンパス) 講師: 箕輪
18,19,26,27: 神奈川県野生動物リハビリテーター(2級)養成講座(実習: 犬猫・野生動物救護センター) [神奈川支部] 対応: 皆川
20: 柴崎幹男都議会議員・都政を語る(ホテルカデンツァ) 出席: 新妻
22: 中央省庁(厚労省、農水省、文科省、環境省、財務省等)挨拶回り及び要請 対応: 小松
23: 全国愛鳥教育研究会 理事会(オンライン) 対応: 箕輪
23: 伊藤達也衆議院議員・政経セミナー(京王プラザホテル) 出席: 小松
30: WRV ニュースレターNo.119 発行 対応: 小松、箕輪、齊藤

=== 1月 ===

- 08: WRV 会計に関する打合せ(立川事務所) 対応: 小森、箕輪
08,09,13,15,16: 神奈川県野生動物リハビリテーター(2級)養成講座(実習: 犬猫・野生動物救護センター) [神奈川支部] 対応: 皆川
21~2/6: 令和3年度日本獣医師会獣医学術学会年次大会(Web開催) 講師: 中川
22: 第2回いきものフェスティバル開催記念「イヌワシが暮らせる自然」(オンライン講演会) 対応: 箕輪
26: 沖縄県獣医師会「野生動物リハビリテーター」勉強会(Web開催) 講師: 皆川、箕輪

=== 2月 ===

- 04: 神奈川県鳥獣総合対策協議会(Web会議) [神奈川支部] 対応: 皆川
06: わいわいサロン(オンライン) [神奈川支部] 対応: 皆川
10: 第57回東京都獣医師連盟 定時総代会(東京都獣医師会会議室・Web会議) 出席: 小松
12~5/15: さがみ自然フォーラム(Web開催) 対応: 皆川
14: 令和4年度第1回日本獣医師連盟役員会(書面会議) 対応: 小松
16: 令和4年度「ヒナを拾わないで!! キャンペーン」協賛団体確定 対応: 箕輪
18: 第21回「野生動物と交通」研究発表会(Web開催) [神奈川支部] 対応: 皆川
18: WRV 会計に関する打合せ(立川事務所) 対応: 小森、箕輪
27: 神奈川県野生動物リハビリテーター(2級)養成講座(試験: 県民活動サポートセンター) [神奈川支部] 対応: 皆川
28: かながわ生物多様性改定に関する検討委員会(Web会議) [神奈川支部] 対応: 皆川

=== 3月 ===

- 01~31: 第17回動物たちのSOS展(野毛山動物園) [神奈川支部] 対応: 皆川
05: WRV 監査 対応: 新妻、町田、高橋、小森、箕輪
05: WRV 東京都支部監査 対応: 新妻、高橋、小森、箕輪
05: かながわ海岸美化財団・オンライン交流会 [神奈川支部] 対応: 皆川
08: 神奈川県鳥獣総合対策協議会・シカ対策専門部会(Web会議) [神奈川支部] 対応: 皆川
14: 令和4年度第1回東京都獣医師連盟 役員会(東京都獣医師会会議室・Web会議) 出席: 小松
15~31: 第3回油等汚染事故対策水鳥救護研修(オンライン開催) 対応: 皆川、箕輪、齊藤

野生動物救護獣医師協会 (ホームページ) <http://www.wrvj.org/> (E-mail) kyugo@wrvj.org

NEWS LETTER No. 120 2022.3.25 発行

発行: 特定非営利活動法人 野生動物救護獣医師協会

事務局: 〒190-0013 東京都立川市富士見町1-23-16 富士パークビル302

TEL: 042-529-1279 FAX: 042-526-2556

発行人: 新妻 勲夫 編集文責: 小松 泰史 編集担当: 箕輪多津男
